

八幡さんで火除厄よけ

江戸時代の寛文―元禄年間（一六六一―一七〇三）に吉田村（現吉田町）から分村した当地は、江戸期を通して「古川坊城村」と称されました。

明治時代に入って「古川村」と呼ばれたあと、同二年の市町村制施行で金橋村の大字「古川」となります。同二年ごろの戸数が四〇戸・人口が二七一人（町村誌集）で、同一七年ごろ村の主産物が米・麦・大豆・ぶどう・綿など（農産物取調表）でした。

昭和三年に檀原市へ編入され、同年一〇月に現在の「古川町」が誕生しました。これよりさきの昭和二六年に創設の光陽中学校が、同五五年に町の東部へ移築されています。

町の鎮守は、古くから東坊城町の八幡神社です。同神社の夏祭りも古くから「ホウラシヤ」と呼ばれ、金橋の古川と坊城の五大字が挙げて行って来た伝統の「大火祭り」です。

祭り当日の毎年八月一五日に古川の氏子たちは、高さ約三メートル・直径約二メートルの大たいまつを担いで火除け・厄よけを願い、他の五字の人々と共に東坊城町に鎮座する八幡神社境内を勢いよく練り回ります。また、弥生時代の防御的な高地性集落「忌部山遺跡」が、南接する光陽町との間に現存しています。